

エッセイコンテスト 2010 徹底研究

中学、高校生が持続可能な開発に向けて世界の問題解決を考える機会をつくる

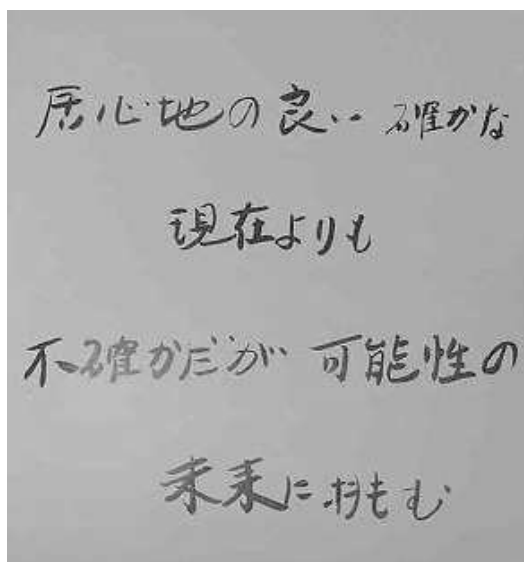
東京都立新宿山吹高等学校 教諭 齊藤 宏
(全国国際教育研究協議会 常務理事)

移住促進から国際協力へ、49年間の経過とともに、世界の中での日本人の生きる道を時代と共に考え、記録してきた歴史あるコンテストです

今は「移住」といっても若い生徒達にとってはほとんどイメージがつかめないうでしょう。エッセイコンテストは当時の国策であった移住促進としての「海外移住懸賞作文」から始まったのです。

後にあげる、テーマの歴史（年度別テーマ表）を見てみると、その流れと当時の時代背景をととてもよく表していることが分かります。

JICA 高校生エッセイコンテストに対する国際研の協力の歴史は古く、「エッセイコンテスト」と改称されたのは最近ともいえる 1990（平成2）年で、最初は前にも述べたように「海外移住懸賞作文」として 1962（昭和37）年中学の部「私の南米観」高校の部「我が国の海外移住はどうあるべきか」という、今ではなじみの薄くなった海外移住をテーマに実施されました。その頃、国際研は「全国高等学校海外教育研究協議会」（以後 全海協）として、戦後の移住の再開と共に農業青年の移住が盛んになり、その対象となる青少年に対し、海外移住の正しい理解と発展を促すための教育の必要性から、農業高校生の卒業後の移住に方向性を向けたものでした。今でこそ、国際研は全国 2500 を超える、あらゆる校種の学校を組織していますが、当時は全国の農業高校の組織でした。移住事業団だった JICA と「全海協」は強い協力関係を持っていました。その協力関係で生まれた冊子「海外への道」の巻頭には当時の全海協副会長中島圭之助氏の「居心地の良い確かな現在よりも不確かな可能性の未来に挑む」という、今でも勇気を奮い起こさせる一文が書かれています。いかに夢と希望を抱いて南米への移



住を考えたか、当時の人々の熱い想いがこめられた文章だと思います。この冊子は今も JICA 横浜・海外移住資料館の資料室に保管されています。

しかし、その後日本の経済は飛躍的な発展を遂げ、国際社会における日本の地位が向上し、国際人としての日本人の育成が論議されるようになり、全国の研究集会においても、しばしば、国際理解、国際協力に関する学校教育のあり方とその方法が検討され、より実践的な国際活動を基盤とした「国際社会で活躍できる人材育成のための教育活動」に流れが拡大していったのです。

この流れは、JICA が「海外移住事業団」から「海外技術協力事業団」を経て 1974 (昭和 49) 年「国際協力事業団」に変わって行く流れと呼応したものでした。その流れを受け、1983 (昭和 58) 年テーマは移住から「国際協力ー21 世紀の友づくり」に大きく変化を遂げました。この年以降、1985 年「地球社会に生きる」1986 年「途上国とのふれあい」などの国際協力に関連したテーマが続き、今年の「行動 ～地球と仲間のために、私たちができること～」に至りました。これも、地球環境変動に伴う地球温暖化などの問題で起こっている世界の環境問題への関心の高まりの世相を現したテーマであります。

1995 年からは、高校生だけでなく、中学生にも拡大し「中学生・高校生エッセイコンテスト」となりました。この時期は 1991 年のバブル崩壊後でありながらも、まだ日本の ODA 予算は世界一位でした。中学生の作品が増えたことから、応募数増加が始まりました。しかし、その後日本の経済は停滞し、ODA 予算は減額を続けます。さらに、小泉構造改革の流れの中で JICA は 2003 年から独立行政法人「国際協力機構」へと変わり現在に至ります。このめまぐるしい変化の中でも、生徒達にその時代時代でのテーマに基づき世界の問題を考えるエッセイを書いてもらい、それが記録として蓄積してきたことは大きな価値を持っていると考えています。

年度	エッセイコンテスト (懸賞作文) 年度別テーマ
1962	【海外移住懸賞作文】わが国の海外移住はどうあるべきか
1963	【海外移住懸賞作文】海外に目を向けよう
1964	【海外移住懸賞作文】民族の発展と海外移住
1965	【海外移住懸賞作文】国際協力と海外移住
1966	【海外移住懸賞作文】フロンティアにいどう
1967	【海外移住懸賞作文】世界の中の日本人
1968	【海外移住懸賞作文】移住 100 年を迎えて (日本の移住は 1868 年に始まった)
1969	【海外移住懸賞作文】私の将来と海外移住
1970	【海外移住懸賞作文】若人の海外発展への道
1971	【海外移住懸賞作文】国際社会に生きる若人
1972	【海外発展懸賞作文】国際化時代と日本人の役割
1973	【海外発展懸賞作文】日本の将来と海外移住
1974	【海外発展懸賞作文】海外に求める私の生きがい、世界資源と日本の将来
1975	【海外発展懸賞作文】これからの日本人と国際感覚
1976	【海外発展懸賞作文】海外に生きる若者
1977	【海外発展懸賞作文】私が考える南米
1978	【海外発展懸賞作文】ブラジル移住 70 年に思う
1979	【海外発展懸賞作文】国際化時代とこれからの海外移住

1980	【海外発展懸賞作文】 これからの海外移住に思う
1981	【国際協力懸賞作文】 日本人の海外発展と国際協力、世界の中の日本
1982	【国際協力懸賞作文】 なぜ国際協力もし私が途上国に生まれていたら、海外移住に可能性を求めて
1983	【国際協力懸賞作文】 国際協力ー21世紀の友づくり自由題 ①技術協力②青年海外協力隊③移住
1984	【高校生懸賞作文】 私の中の途上国
1985	【高校生懸賞作文】 地球社会に生きる
1986	【高校生懸賞作文】 途上国とのふれあい
1987	【高校生懸賞作文】 開発途上国とのふれあい
1988-1989	【高校生懸賞作文】 21世紀を生きるー途上国とのふれあいの中で
1990	【高校生エッセイコンテスト】 えがお・で・あい
1991	【高校生エッセイコンテスト】 (自由)
1992	【高校生エッセイコンテスト】 心の地球儀回ってますか?
1993	【高校生エッセイコンテスト】 自由 (開発途上国について)
1994	【高校生エッセイコンテスト】 自由 (開発途上国について) 地球環境を守るため日本は何をすべきだと思いますか
1995	【中学生・高校生エッセイコンテスト】 自由 (開発途上国について)
1996	【中学生・高校生エッセイコンテスト】 自由 (開発途上国や国際協力について)
1997-2004	【中学生・高校生エッセイコンテスト】 途上国や国際協力について考えていること
2005	【中学生・高校生エッセイコンテスト】 開発途上国や国際協力、国際理解について考えていること
2006-2007	【中学生・高校生エッセイコンテスト】 世界のみんなが幸せになるために ～私が考えること、できること～
2008-2009	【中学生・高校生エッセイコンテスト】 地球と生きる～地球に暮らす一員としてできること、考えること～
2010	【中学生・高校生エッセイコンテスト】 行動 ～地球の仲間のために、私たちができること～

エッセイコンテストに参加することはどんな意味があるのでしょうか

国際研は JICA 国際協力機構の、この事業に対して、創設時からその目的を共有し協力、後援しています。毎年、全国総会や全国大会において参加勸奨を行い、各地区国際研の事務局が全国 2500 校を超す会員校を軸に組織的に学校現場での応募に協力し、予選審査にも協力してきました。さらに最終審査員に全国会長が加わるなど、JICA との歴史的協力関係からも組織をあげて取り組んでいる行事です。

その教育的意義は、1992 年にブラジルで開かれた地球サミットで提唱された、「持続可能な開発」に向けて、貧困や格差、人口増加、健康や保健、環境、子どもや女性などにかかわる、グローバルイシューの解決は、2000 年 9 月の国連ミレニアム・サミットにおいて 21 世紀の国際社会の目標として、極度の貧困と飢餓の撲滅、普遍的初等教育の達成、ジェンダーの平等と女性の地位向上、幼児死亡率の削減、妊産婦の健康の改善、HIV/エイズ、マラリア、その他の疾病の蔓延防止、環境の持続的可能性の確保、開発のためのグローバル・パートナーシップの推進の 8 つの目標を掲げミレニアム開発目標 (Millennium Development Goals :MDGs) として、2015 年という達成期限と具体的な数値目標を定めて国際社会がとるべき行動として国際協力していくこととなりました。これらのグローバルイシュー解決のためには、問題に気付き問題解決に取り組む若い世代を育てることが最も効果的で、世界の中でともに生きなければならない日本の未来のために欠かせない教育、いわゆるグローバル教育のために必要であると認識しているからなのです。

資源のない日本にとって、世界の人々と共生できる関係を未来に向けて築いていくためには、開発途上国への技術支援や資金援助などの国際貢献は欠かせません。単に見返りを求めるだけの経済論理ではなく、長いスパンで信頼を獲得するためには、「国際協力を日本の文化」として世界に発信していく必要があるのです。

しかし、日本の経済の低迷と共に、国民の中には、国内での貧困、格差が広がっている今、なぜ多額の予算をODAに向けるのかという意見も広がりを見せています。2000年まで世界1位の援助国であった日本は、1997年をピークに約4割もODA予算が削減され、いまや米、仏、独、英に続く世界第5位にまで落ち込んでいます。

欧米諸国はアメリカで起こった2001年9.11のテロのあとに途上国支援の重要さに気づき、逆に援助を増やす方向に転換しています。日本だけが萎縮している現状は、国際社会の中で信頼を失っていくことも考えられるのです。

確かに、ODAに不正や汚職との結びつき、現地のニーズに合わない無駄な機材の供与などが目立ち、ネガティブな報道の影響も加わって、開発途上国の最前線で活躍している青年海外協力隊やシニアボランティアなどの献身的な素晴らしい活動までもがかすんでしまっているようです。

こうした現状を踏まえつつ、中学、高校生たちがエッセイコンテストに参加することは、世界の解決できない問題の解決のために、日本の国際貢献について広く自分の問題として考えてもらうことにつながります。彼らに気づき考えてもらうことこそが、活動の第一歩であり、日本の未来のためになるのです。

中学、高校の学校現場で考えてもらうことは、日本の就学率の高さからみても、将来の市民全体への啓蒙になり、大きな効果が期待できます。ランダムな市民への啓蒙より、組織的な学校現場での啓蒙のほうが、はるかに効果が望めるのです。

国際研は、学校現場でグローバル教育・開発教育を研究し、実践している唯一の全国組織です。この教育の特徴は、解決すべき問題の本質の複雑さからも、一つの教科内容だけで完結する教育ではありません。あらゆる教科、科目がそれぞれの視点から関わる必要があります。だからこそ、多様な教科の教員が組織している国際研が価値ある組織と言えるのです。

さて、生徒にとっては、エッセイを書くことは自分の考えをその成長段階で整理しまとめることであり、自身の次への行動へつなげる準備にもなります。同時に、教師たちにしてみると、グローバル教育・開発教育の実践活動が本当に生徒達の心に伝わっているのかどうかを検証できる機会になると考えられます。

つまり、教師がグローバル教育・開発教育に携わり、地域や学校現場で様々な取り組みを行った、その反応やフィードバックが生徒達のエッセイに文章として生きてくるのです。

いま生徒達が、何を感じ、どのように行動し、どのような未来を生きようと考えているのか、その一端を読み取ることができるのです。それは、時代とともに変化していく生徒達の偽らざる感覚で、その内容の深さこそが、そのまま私達の教育への評価でもあると考えられるのです。

エッセイ応募数の増加はその目的を理解する教師の増加に他ならない

もともと、学校には、国際協力や国際貢献を教える教科、科目はなく、このエッセイ応募を広げていく共通の推進者はいません。それでも年々応募者が拡大傾向を示してきたのは、国際協力という分野が社会に広く認知されてきたこと、総合的な学習の

テーマの中で、国際理解やボランティアを扱えるようになったことと、青年海外協力隊への教師の現職参加制度や JICA 海外教師派遣研修による帰国教師の影響、そして全国の学校現場において、私達、国際教育研究会の活動が組織的に広がってきた証拠でもあると考えています。また、「学校賞」が作られたことも大きな理由で、学校全体で取り組んだ学校は褒章されるシステムのため、大変ではありますが、学年や学校全体で取り組めばその努力が報われることになったのです。しかし、報われるとしても、学校において、学校全体で取り組むことを、協力してもらうことは簡単なことではありません。学年会や職員会議で他の担任の理解を得なければならず、それを提案し説得できる教師は、その教育効果を信じ本気で提案できるリーダーとなる教師がいなくてはならないのです。

そのおかげで、明らかに学年全体や学年全体での課題として応募してくる学校も増えてきました。夏休みの課題や宿題とする学校の多くからは、いわゆる作文嫌いで文章を書くのを嫌う生徒も含めて、作品が提出されて、質の低下との批判もありますが、数が多くなればユニークな作品や質の高い作品も増えることも間違いありません。

重要なことは自発的な応募が広がる流れをつくっていく事ですが、生徒達は何かのきっかけがなければ自分から書いてくることは、ほとんど期待できません。

そこで、教師たちが授業や学校行事の中で日本の国際協力にふれたり、海外で経験を積んだ講師を呼んで話してもらったり、留学生との交流会を企画するなどの生徒達が書きたくなる体験をさせているのです。

エッセイを書き、自分の考えや気持ちを文字に表すことは、その瞬間での自分の思考の記録を写真のように残すことと同じで、その文章を後から読むとき客観的に自分の成長の過程を知り、その自分を知った上で次のステップへの成長につながるわけですから、教師のフォローはとても大きな力となっています。

教師の立場はエッセイ勸奨を通じて生徒達の人生の進路へのファシリテーターの役目です。つまり、エッセイを書くきっかけを作る関わりだけでなく、エッセイが作品としてのエッセイに終わる事がないように継続して関わっているのです。

中学生、高校生が自分の体験に基づいたエッセイを書くことで、自分自身のアイデンティティに気づき、それが自分や人を動かす力になるような方向に導いたら、素晴らしい事でしょう。

中学では2年連続減少、高校は微減、2010 エッセイ応募の傾向を分析する

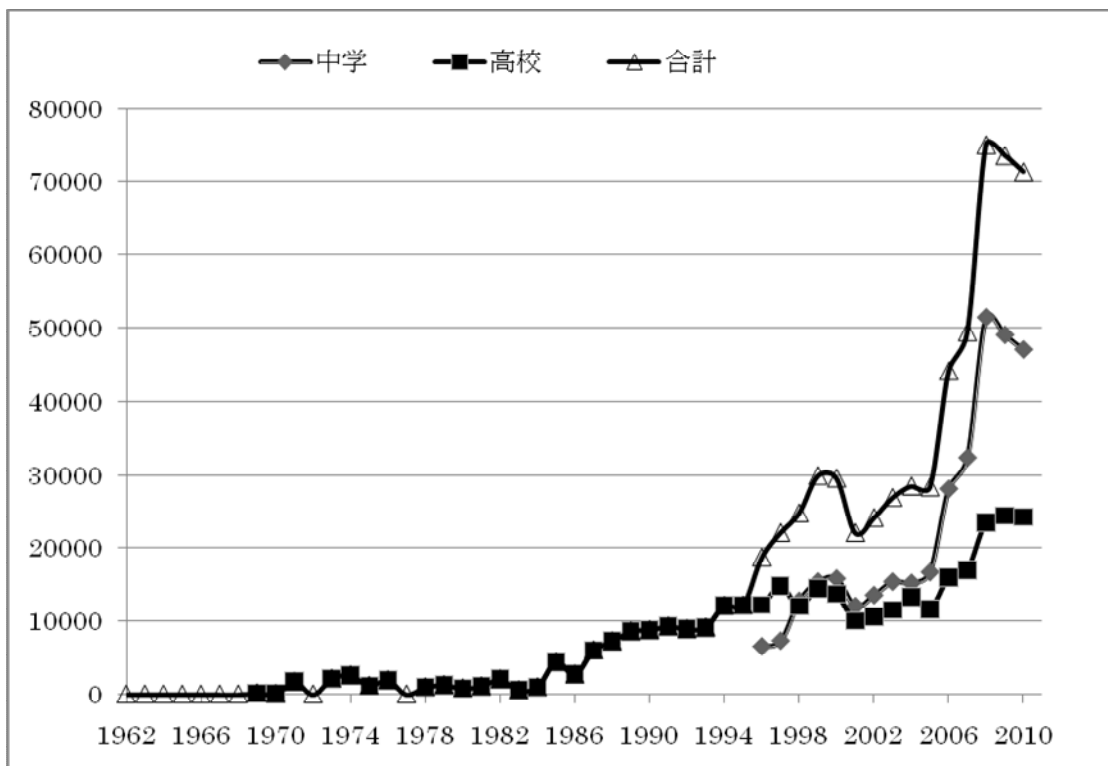
応募数は、中学では2年連続して減少で1 昨年の急増に対しての調整が続いています。

高校でも微減で共に同じ傾向となりました。この傾向の背景を考えると、今年のテーマは、2年連続で続いた「地球と生きる～地球に暮らす一員としてできること、考えること～」から「行動 ～地球の仲間のために、私たちができること～」に変わりました。しかし、読み比べてみても、「行動」という具体的な言葉が入ったが内容的には大きく変化したテーマとはいえません。

しかし「地球」という言葉が入ると、国際協力やボランティア活動に直接かかわっていない人でも、環境問題をテーマと考えれば問題意識も持ちやすく、書きやすいテーマであることが、応募が減少したと言っても、いまだに高水準の応募を保っている理由の一つでしょう。

それを裏付けるように 1994 年に初めて、「地球」という言葉が入り「地球環境を守

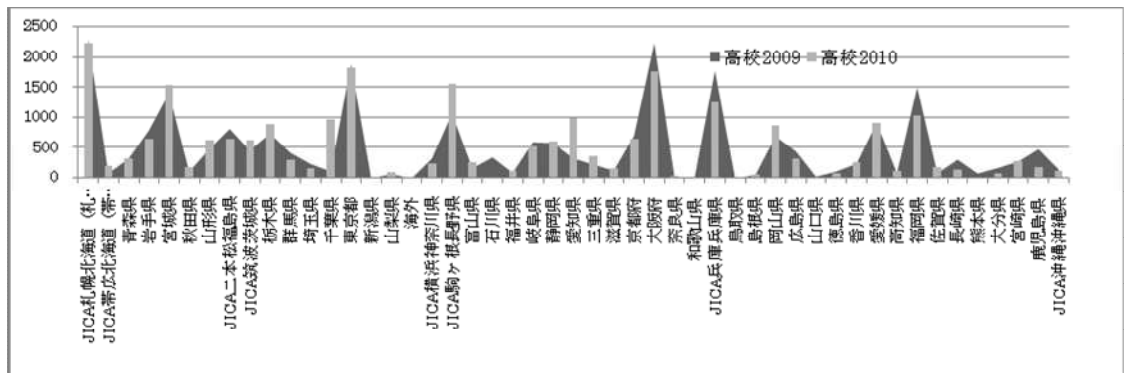
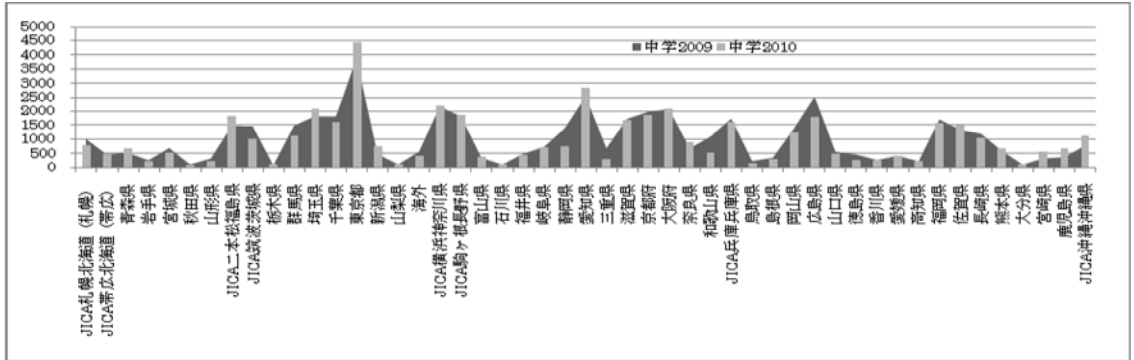
るために日本は何をすべきだと思いますか」というテーマが登場したときに、およそ30パーセントの応募急増がありました。2008年にふたたび「地球と生きる～地球に暮らす一員としてできること、考えること～」とテーマが変わると、中学58パーセント増、高校38パーセント増と共に応募が急増しました。



年度	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010
中学生	12,042	13,532	15,383	15,206	16,695	28,123	32,390	51,493	49,084	47,081
高校生	10,056	10,616	11,524	13,259	11,657	15,962	17,020	23,517	24,452	24,234
合計	22,098	24,148	26,907	28,465	28,352	44,085	49,410	75,010	73,536	71,315

今回の応募数減の背景ですが、似通ったテーマで、リピーターにとっては、素材を使ってしまって書きづらい事はあると思いますが、それならば、全国各県で一様に減るはずで、各県からの応募数を分析してみると、全体が減ったのではなく、まちまちの状態になっています。

各県の中学、高校の昨年との応募数のグラフをご覧ください。後ろの面グラフが昨年の2009年で、棒グラフが今年2010年の数を示しています。これを見るとわかるのですが、中学では、300作品以上増加したのは福島や東京、愛知、沖縄などが増加していることが分かりますが、一方で300作品以上減少したのは茨城や群馬、静岡、三重、和歌山、広島などが減少していて、この傾向は高校でも県は違いますが同じで、学校応募が基調となっている現状では、原因は応募の学校が1校へれば学年の300人程度の増減が出ることを考えると理解できると思います。



それでは、エッセイコンテストの応募数は今後どうなるのかを考えてみましょう。

全国の中学生、高校生の数は、中学生 360 万人（平成 21 年度文部科学省統計男子 183 万 9 千人、女子 176 万 1 千人）高校生 334 万 7 千人（男子 169 万 5 千人、女子 165 万 2 千人）で、中高の生徒数は、それほど大きく違いありません。このことを踏まえれば、高校生のエッセイコンテストの応募数は、飽和にまではほど遠い数であり、今後の運営でさらに増加させるのは可能と考えられます。

実際、政府系の作文・エッセイコンテストで応募数が特に多いものに、1981(昭和 56)年から続いている「全国中学生人権作文コンテスト」（法務省など）があります。これには、一桁違う 887012 名、全国の中学生の 24.9%が応募しています。

学校における大きな課題であるいじめなど、生徒たちに身近な問題であるためでしょう、応募数が多いのはうなずけます。人権教育を考えさせることは、日本の将来の民主主義の熟成のためにも大きな意義があります。

さらに中学生の「税についての作文」（国税庁など）では、543736 名（22 年度）の中学生が応募しました。（「税に関する高校生の作文」では、173930 名（22 年度）の高校生が応募）。この目的は未来の日本国家熟成のため国民の義務としての租税教育ですが、これは、ODA の基盤となる大事な教育です。それを証明するように平成 19 年度に内閣総理大臣賞を受賞した古関万倫子さん（秋田県中学 2 年生）の作品に、エッセイコンテストでも通用する、興味深いものがありました。

彼女は、「7 千円の重さ」というタイトルで、国の予算の 1.6%、一人当て約 7 千円

の税金が ODA として使われていることを教えられ、驚く場面から作文を書き始めています。彼女の母が ODA のモニターとなり、カンボジアを視察したのですが、帰国した母からは、カンボジアの首都には街灯も満足になく、道路も舗装されていない、学校にも行けずに働いている子どもたちも多く、ベッドにはシーツもない病院で普段着のまま横たわる患者などの話を聞きます。彼女はとても驚くとともに、日本では学校教育が義務化されて、子どもたちに平等な教育をしてくれる。教科書も無償で、改めて税金が有効に使われ、私たちの生活を支えていることを実感したと書いていました。

しかし、現地の人たちの笑顔の写真をみて、考えが変わりました、それは、日本人のおかげで井戸ができて、きれいな水を飲むことができ、子供たちは絵本をもらい、関係のない母たちの訪問にも日本人として喜んで迎えてくれたことから、この 7000 円が地球という大きな国の中で生きていくための義務だとわかったと結んでいます。

この内容から、改めて日本の ODA 事業を国民にしっかりと説明し国民的理解を得ることが納税意識を高めるだけでなく、世界の共生のためにいかに大切なことが分かります。

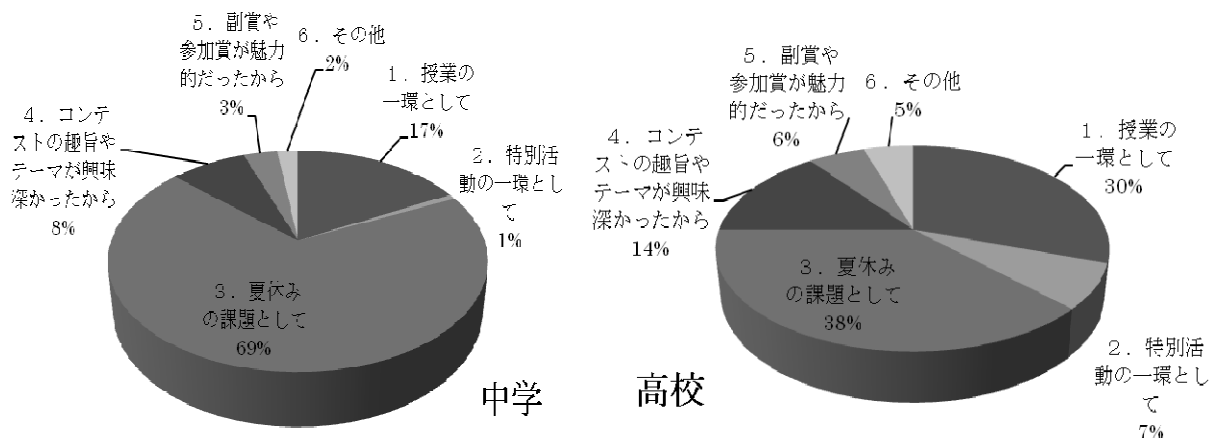
だからこそ、日本のより多くの学校で、真の ODA の姿を理解してもらうことが重要となるのです。学校現場での組織的なグローバル教育の普及、拡大を目指して、全国国際教育研究協議会もより一層努力しなければなりません。人権や税など国内の問題を主に考えるコンテストに対して、国外、世界のことを考えるコンテストも、国民のバランス良い思考を広げるためにも必要なコンテストと考えられます。その意義が社会的に認知されれば、エッセイコンテストへの応募も上の 2 つの政府系作文コンテストのように、一桁違った応募数になってくると考えますし、そうしていく必要があると考えています。

2010 年までの応募傾向をグラフから見ていきたいと思います。今年度は中学で約 4% 減の 47081 作品、高校では微減の 24234 作品でした。昨年からの減から 2 年連続減で 1 昨年度の 38.2% の大幅増の反動の傾向が続きました。2006 年から 3 年間続いた作品増加傾向が一段落したといえるでしょう。2006 年からの増加傾向の大きな理由の一つは、前にも触れましたが、テーマの大きな変化が考えられます。これまでのテーマは「開発途上国」や「国際協力」という専門的でイメージがわからない言葉が使われていたのですが、この年から「世界みんなが幸せになるために ～私が考えること、できること～」といういろいろな切り口から書き易いテーマに変わったことです。これは、1994 年に一度「地球環境」という言葉がテーマに入った時もそれまでの応募数の高原状態を破り増加に転じたことから明らかです。

国際研も学校現場における応募勧奨のために、JICA と共同事業として作成した「国際教育・開発教育インフォメーション」を、全国の各学校へエッセイのポスターや要項と一緒に発送しました。こうした広報活動を通じ、エッセイコンテストの情報が広く学校現場に知れわたっていったことも、応募数増加の一つの要因といえるでしょう。

エッセイコンテストの応募の内訳を分析してみます

中学、高校ともに、応募の内訳を見ると、「夏休みの課題」、「特別活動の一環」、「授業の一環」の合計が、中学では 87 パーセント、高校では 75 パーセントになります。すなわち、ほとんどが、学校側や教師側からの指導の結果としての応募なのです。



つまり、教師の関心が応募数にそのまま跳ね返ると見るのが無難なのです。そして、教師の関心を集める一つが、先ほどの表で示した、学校賞の受賞確率の高さなのです。現場の教師たちの多くは、この種のコンテストに応募するときに、課題とする教育効果が高く、その結果が生徒達にとって有益な結果になることを心がけ、フォローしていきます。教育の一つとして勸奨していることが、生徒たちに、次への希望を与える教育効果がないならば、継続はありえません。その心配を軽減してくれるのが学校賞の存在です。

最優秀賞や、優秀賞、審査員特別賞を受賞できれば、開発途上国への海外旅行に行ける素晴らしい副賞がもらえるのですが、その確率は極めて低いため、そこに魅力を感じて応募するというのは少数にとどまります。グラフを見ると分かるのですが、中学、高校とも11名が開発途上国への研修に行ける賞は、たしかにすばらしい賞なのですが、それが魅力的という答えは中学3%、高校6%しかないことから裏づけられます。

	最優秀賞	優秀賞	審査員特別賞	入選	支部賞	佳作	JOCA賞	特別学校賞	学校賞	応募総数
中学	3	4	4	11	32	133	108	33	254/1264	47081
高校	3	4	4	10	27	47	96	26	85/343	24234

入賞する人数を見てみますと、中学では最優秀賞3名、優秀賞4名、審査員特別賞4名、入選11名、支部関係の賞32名、佳作133名、JOCA賞108名、特別学校賞33校を含め、学校賞254校で、合計個人295名、学校254校が何らかの賞を受賞しました。

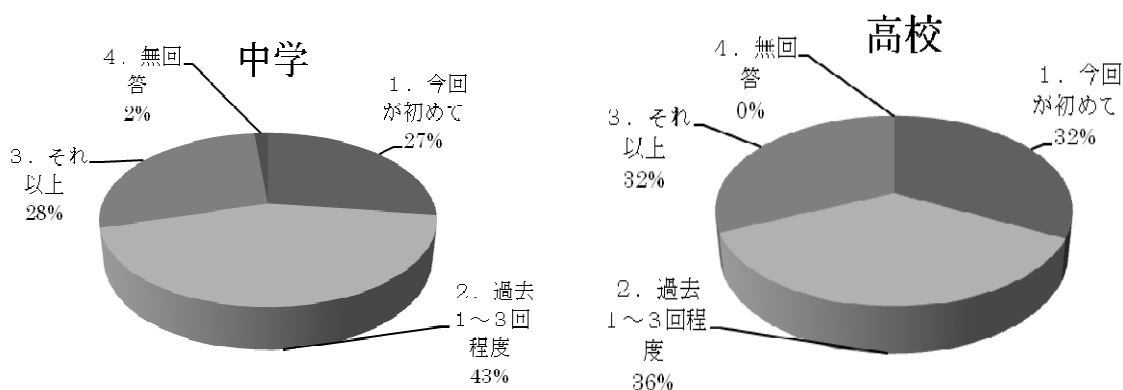
高校では最優秀賞3名、優秀賞4名、審査員特別賞4名、入選10名、支部関係の賞27名、佳作47名、JOCA賞96名、特別学校賞26校を含め学校賞85校で、合計個人191名、学校単位では85校が同じく賞を受賞しました。この中で海外研修に行けるのは中学11名、高校11名で、高校では0.045%、中学0.023%の激戦です。その他の賞を入れても中学では0.62%、高校でも0.78%で1000人に6~7人程度という極めて少ない確率です。

一方学校賞となると、高校343校の応募に対して25%、中学では1264校の応募に対して20%となり、学校賞の受賞率が高いことが示されています。

「コンテストの趣旨やテーマが興味深かった」という項目には中学で8%、高校では14%もあり、中学生に比べ、高校生の意識の高さを証明すると共に、テーマに関しては、書き易いテーマを決めることはかなり効果があることが分かりました。

テーマが「行動 ～地球の仲間のために、私たちができること～」ということで、グローバル 이슈の中で、地球環境に関わる作品が多数見られました。地球環境問題は、生徒にとって身近に感じることであり、コンテストに応募しやすいテーマであったため、たくさんの応募があったと思われます。

しかし、コンテストの規模がここまで大きくなった主な理由は、生徒個人の動機が高まった結果と見るよりも、先ほども述べた、学校応募の定着にあると言えるでしょう。学校、教師の指導による学校応募の回数を見てみると、中学も高校も、初参加は32パーセントで、その他はいわゆるリピーターです。つまり2/3はまた翌年も応募してくるのです。毎年新規の学校が増えていけば、当然応募数は増加していくことになります。



学校現場で、いかに教師の努力により、国際協力に関心がむけられているかは、こうしたデータから読み取れます。

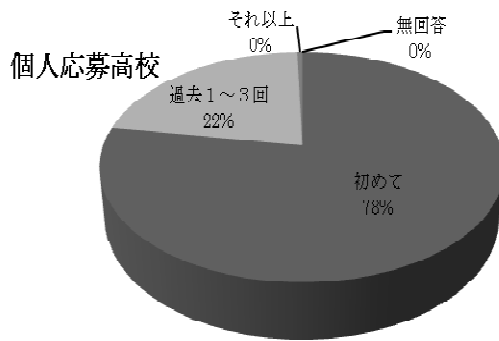
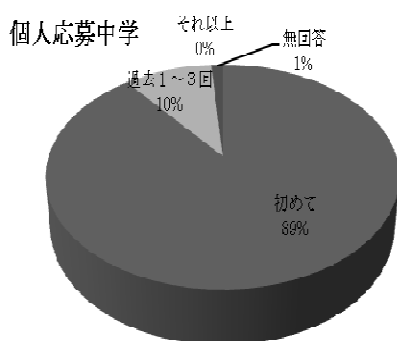
しかし、学年全体でエッセイを出すことになると、他の学級担任などの了承と協力が必要になってきます。学年で生徒に宿題として出し、夏休み明けに生徒からたくさんの作品を集めることは、一人の教師の力だけで出来ることではないのです。実際に、学年や教科などで了承を得るために大変な努力をしています。

とはいえ、学校では行事として一度了承が取れば、次の年も続けられることが多くあります。従って、応募の動向を見ると一回、1年限りではなく毎年続けるというリピーターに結びついてくるのです。グラフからわかるように、中学も高校も、一番多いのは1回から3回の応募で、さらにそれ以上を加えると、中学71%で、高校68%で、毎年、エッセイコンテストに参加してくれる学校、その学校でレピーターとして頑張ってくれている教師がいかに多いかが見えてきます。

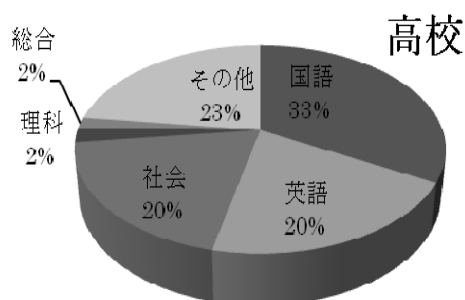
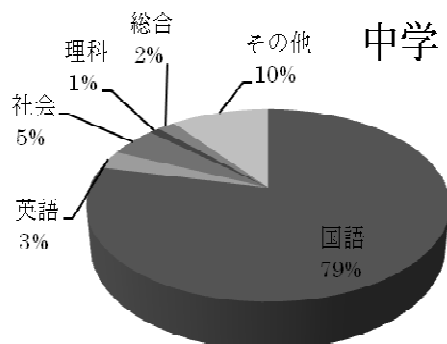
これは個人応募のリピーター率を見てみると明らかです。中学では初めてが89%で高校が78%で、今回限りという参加の傾向が見て取れます。つまり、個人の応募にたよるとすると、毎年、新しい人に関心を持ってもらわなくてはならず、広報活動もよほどしっかりやらないと集まらないという事になるのです。

ただ、個人応募には良い面もあります。これこそボランティアとして応募してくる

ため、もともと問題意識を持った生徒が応募してくるため、内容が良いものになる可能性は高いのです。個人応募では、「開発問題や国際協力に興味関心があった」が中学で35%（学校応募8%）高校で31%（学校応募14%）となり、明らかに高い傾向を示しています。



次に学校応募の教師の教科を見てみましょう。学校応募のアンケートから提出をまとめた指導教科が読み取れます。この表を見てみると、エッセイコンテストだけに、中学で国語が多いのは納得できますが、高校では意外にもそれ以外の社会や英語、理科も含めてほとんどの教科で指導されていることがわかります。高校では、その他の中に、農業や工業などの教科も含まれていることも提出作品から明らかです。こうした教科の広がりこそが、国際協力という内容の多様性と奥深さを示しているのです。切り口次第で、国際教育は、どのような教科のテーマにもなるのです。だからこそ、学校全体で取り組めるコンテストなのです。高校では特に、私たち全国国際教育研究協議会の組織力も関係しています。国際研にかかわる教師は、その歴史からもあらゆる教科の教師がいます。この国際研の組織は、全国レベルではまだ高校が中心であるという事からも、中学では、「作文」として国語が扱う率が高いこともうなずけます。



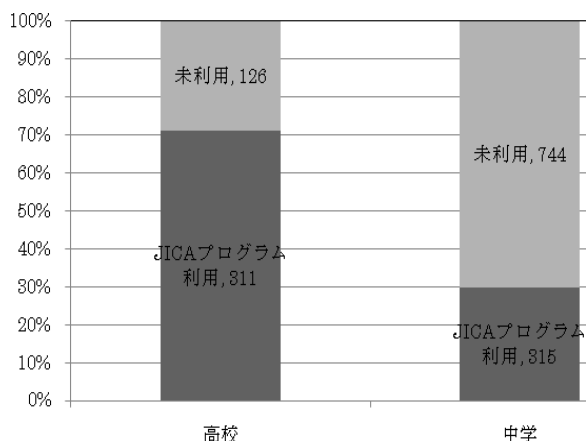
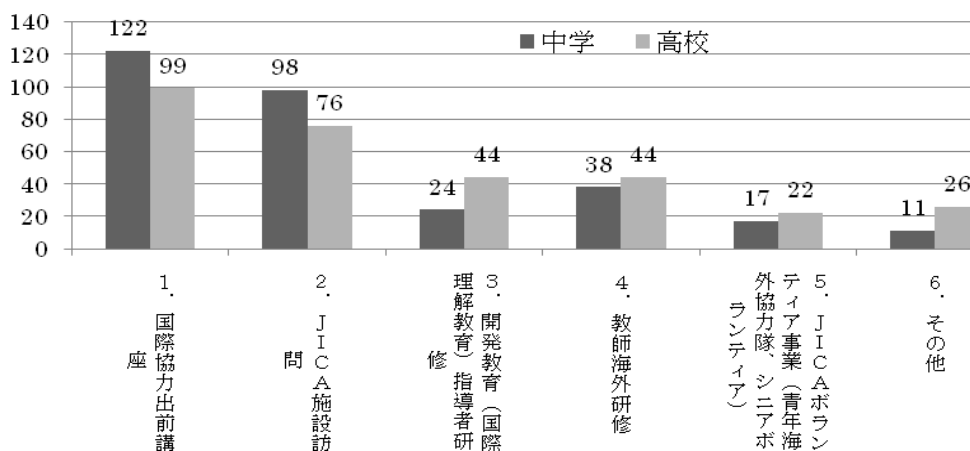
学校現場では学校に来る、様々なコンテストの案内やポスターのすべてが貼られるわけではありません。たくさん送られてくる中から何を取捨選択し、どのポスターを

校内に掲示するのかは、関心のある教師が校内にいるのかにより決まってきます。取捨選択する判断基準として、実施機関が公的な省庁ではないものの、国際協力機構という独立行政法人が実施しているということは、企業が独自に行っているコンテストに比べて信頼性が高く、浸透しやすいことは、たしかでしょう。

ここで、エッセイ勸奨を行う教師がどんなことを通じて生徒に働きかけているのかをメニュー別開発教育事業利用履歴を見てみましょう。(下の棒グラフ参照)

多数を占めるのは JICA が行っている国際協力出前講座や JICA 国内センターへの訪問です。学校行事や「総合的な学習の時間」などで、青年海外協力隊から帰国した人たちに学校に来てもらって現地のリアルな話を聞くことや、校外学習として国内センターを訪問するなどが行われたことがわかります。JICA 施設では、担当者が丁寧に説明してくれるため、2 番目の高い数字を示しているのではないのでしょうか。

また、教師自身が教師海外研修や青年海外協力隊、シニアボランティアなどに参加した人もいます。ただし、教師海外研修にせよ、青年海外協力隊への参加にせよ、教師の数としてはまだ少数です。今後、この少数の教員たちが、海外の途上国での経験を語ることで、生徒に強い影響を与えている有効なメニューとなると思われます。



このメニュー別利用者数はもう一つ興味深いデータがあります。それは、メニューを利用した教師と利用していない教師の割合です。これが中学では未利用者が 70% もいることです。一方高校では 70% が利用者で、逆転しているのです。高校における利用者が多いのは、やはり、国際研

の全国組織力でしょう。49年の長い歴史の中で JICA と作られた協力関係が浸透しているからです。中学のエッセイが始まったのは 1995 年からで 15 年ですから 3 分の 1 にも満たないことを考えると仕方がないことでしょう。それだけに、中学の教師への JICA プログラムの浸透は次の拡大に向けて重要な柱となるでしょう。

いずれにしても、教師は、生徒たちに世界の問題を考えてもらうことに教育的価値があると考えて、エッセイコンテストへの参加を勧奨しています。中学校や高校で生徒達に作文を書かせることは、生徒指導の中でも大変苦勞のいることで、よほどのインセンティブがないと生徒が自発的に書くことはほとんどないのです。

ところで、生徒にとっては、夏休みの宿題として、必ず書かなくてはならないといわれると、作文嫌いの生徒はとて多いので、強制的に参加させられたと感じる生徒が少なからずいるでしょう。実際に、過去のアンケートでも、無理やり書かされたという意見が見られました。それだけに、参加にあたって、教師は、このエッセイを書く意義がどこにあるのかをしっかりと説明しなければなりません。生徒の自発性を高めるためのいねいな説明と、書くために考えることこそが世界の問題解決への参加の一步であることを知らせることが重要でしょう。

また、わずかな人数とはいえ、入賞者の中から中学・高校それぞれ 11 名が、副賞として、私的な旅行では行くことが極めて難しい開発途上国の ODA 現場への研修旅行に参加できるというのは、他の政府系のコンテストの賞品と比べても大きく違う点です。こうしたことを強調し、応募へのモチベーションを高めることが重要でしょう。

優秀賞に選ばれた生徒達に、研修旅行に行ってもらおうということはとても効果的で、現地でさらなるリアリティに接することになり、生徒自身の成長に大きな影響を与えます。こうした経験をきっかけに、大学で国際協力分野を選び、国際協力の道での活躍を目指している人もいます。国際協力を日本の文化として育てるためにも、優秀な作品を書いた生徒を現地で研修させるのは、人材作りであり日本の将来にとって国益となる先行投資でしょう。

高校部門の最優秀賞や優秀賞はどんな作品が選ばれているのか紹介します

今年の外務大臣奨励賞を受賞した群馬県の勢多農林高等学校の小林さんの「異国の地で見つけた私の夢」は、学校で行っているアジア地域への農業研修に参加した時の驚きや衝撃を受けた体験を書いています。フィリピンの農業高校で、ほとんど耕すこともせず、スカートのまま畑にでて作業をしていて、雑草の処理もしていない。日本の農業技術との格差を知った。スラム街では痩せ細り、衣服が薄汚れたストリートチルドレンを見た。日本に戻り何不自由なく育ってきた自分に何ができるか悩んだすえ、自分が勉強しているバイオテクノロジーで、いつの日か農作物の品種を改良し、人口増加にともなう、食糧危機を解決し、ストリートチルドレンのお腹を満たすと考えるにいたったのです。

日本より技術的には劣った開発途上国での研修は技術的には力になるとは思えないのですが、日本の農業高校生に、本気で勉強して日本の農業技術を世界に役立てる気持ちに変えていく、開発途上国の持つ力は不思議で、現地に行った、感受性の強い若者にはとても大きなインパクトを与えます。技術以上に心を動かすことができます。日本人が日本にいてフィリピンのことを調べても、ストリートチルドレンの映像を見ても、ここまでの決意をするまでにはいたらないでしょう。JICA と国際研が海外移住勧奨の時代から、この開発教育が人の心を動かすと考えてきたことは間違いなかったようです。

文部科学大臣奨励賞になった、山形県の東根工業高等学校の古瀬さんの「モンゴルに灯った、光プロジェクト」も技術援助にかかわる興味深い作品でした。モンゴル人の女子学生で山形大学工学部に留学中のボルコさんが持った思い「太陽光発電をモンゴルで使えば、大気汚染の解決につながる。」この思いを実現しようと商品の購入ではなく、自分たちが研究して製作した手作りの太陽光発電システムをモンゴルに設置しに行くプロジェクトを学校全体で進めたのです。モンゴルの高校での感動的な点灯式を終えたあとに、モンゴルの高校生たちが、「真剣に勉強してノーベル賞を取りたい」とか「建築士になり、ウランバートルで一番大きなビルを建設したい。」など自分の目標をしっかりと持っていることを聞き自分が恥ずかしく思えたようです。そして、純粋なモンゴルの人々との交流から、「教育を受けたものは、社会に対して自分が学んだことを還元していく必要があるのだという事を学んだと思う」と書いています。

太陽パネルの技術供与をした、自分たちが、モンゴルの人々から、学ぶことの意味を逆に教えられ、力付けられるという結果となり、ここで作られた人間同士の交流やふれあいが続いていく、まさに技術を人間同士のつながりに変えていく素晴らしい実践だと思います。日本の技術は最先端で、世界に誇れるものであることは間違いありませんが、たとえ世界に役立つ技術としても、技術だけでは人は動かさない、間に人が入り交流やふれあいを行う事がなければ、世界への技術移転は進まないという事がよく理解できる作品でした。

以下は、昨年までの入賞作品ですが、心に残った作品やユニークな作品を紹介します。

東京都の聖心女子学院の高橋さんの「心で」は、フィリッピンの子供たちを助けるボランティア活動に参加した経験を書いています。ところが、子どもたちはそんな不安をかき消すように、限りない笑顔にあふれていました。子どもたちがすべてを信頼して受け入れてくれたことで、自分も彼らを受け入れることができたのです。彼らの心の姉になり、自分のしたことが少しでも幸せにつながることを願い、心から行動することが何かを動かせると信じるころができたことと結んでいます。

この作品は、ボランティアをしようとして心に決めるのは、まだ何も関係のない離れたところにいる客観的な自分ですが、実際に現場に着いたときに、一体どのように接したらよいのか、コミュニケーションは取れるのか、思い悩むことは誰もが経験する心の動きをつづっています。決して上から接するのではなく、若者らしい謙虚な気持ちを持ち、体当たりで参加した、正直な心の動きを書いています。ボランティアは決してされる側だけが助かるのではなく、する側の心の葛藤が自分を強くすることに気付かせる作品です。

海外アメリカのトーマスジェファーソン高校の藤生さんの「ハンカチの種」は日本人ですが、16年の人生の大半をアメリカで暮らしているなかで、アメリカ人の使い捨ての習慣に疑問を持ったことから始まります。その結果、日本人のもつ「もったいない」という心をアメリカに輸入したい気持ちになりました。そんな時に「Cradle to Cradle」という地球環境を守るための本に関するプロジェクトに応募した結果、250ドルの賞金を受け取ることができたのです。有効な賞金の使い道を考えた結果、ハンカチを800枚買い、多くの生徒たちに手紙を付けて配ることにしました。使い捨てではなく、何度も使えるハンカチを使ってもらえるように考えたのです。

アメリカで暮らす日本人が「ゆりかごからゆりかごへ」という持続可能な社会へ向けてのプロジェクトに日本の「もったいない」の心をアメリカに輸入するというユニークな発想がとても独創的で面白い。その上、入賞して受け取った賞金の使い道にはさらに驚かされました。買えるだけのハンカチを買ってアメリカの生徒達に配ったというのです。グローバルイシューの解決はきっとこんな、ユニークな発想と実行力をもった人達が育ってくればできるのではないかと応援したい気持ちになる作品です。

長野県の長野高校の草間さんの「実践+継続=無限大」は7年間続けてきた環境活動とフクロウの保護活動について、カナダで開かれた生物多様性のユース国際会議で発表し、ベストプレゼンテーションを受賞しました。その会議で、南米では、大きさも色もバラバラな30種類以上のジャガイモを一つの畑で育てている発表を聞いたことから考えます。効率が悪く、先進国ではそのようなことはしないのですが、ある年の冷害のときに、すべてがだめになることはなく昔からのジャガイモは生き残ったのです。また、国連の田瀬さんが現地の人を信じ、千ドルのフィルター付の井戸ではなく、現地の人で直せる、百ドルの井戸を作ることで、その技術はその村の人達のものになることを教えてくれました。自分としてはフクロウの研究をさらに続け、将来、効率性や経済性といった基準だけでなく現地の人を信じ、現地の人と共に活動できる職業につきたいと結んでいます。

この作品は持続可能な地球の実現方法について、自分が続けているフクロウの保護活動の研究から学んだ、科学的、技術的な見方を基本に、他の発表や技術を評価しています。一つの品種を効率よく育てるのか、たくさんの品種を同時に育てるのか、この問いに対して世界の開発は効率を取ってきました。しかし、ひとたび急激な環境変動が起こると、全滅という結果を生んでしまうのです。技術は効率や経済性だけを重視するのではなく、現地の現場を大事にする発想は、これからの開発援助には欠かせない考え方で、今後も自分の研究を続け、その原点から開発援助に関わる人間に育って欲しいと思います。

青森県の青森高校の山田さんの「Back to the 江戸」は水筒男子が急増していることに対抗して、女子も地球のために出来ることを行うべきだと考えます。歴史を学ぶと、江戸時代はリサイクル社会だったことがわかり、現代にも江戸時代のリサイクル社会を越す社会を女子が立ち上がって作っていきたく続けます、化粧水なども詰め替えて使う「詰め替え女子」や再生されたものを使う「再生女子」、毎日の通学は自転車を使用する「自転車女子」などがいて、体型の引き締めも同時にできると提案しているのです。地球環境問題が原因で涙を流さず、多くの人がずっと笑顔でいるために、「Back to the 江戸」を目標としていきたいと結んでいます。

江戸時代は再生社会であったということで、最近の「歴女」ブームも関係しているのか、「Back to the 江戸」という発想がとてもユニークです。地球環境問題解決を義務や責任として重く考えるのではなく、女子高生らしい。軽快で柔軟な発想で「詰め替え女子」や「再生女子」など、何かはやりそうなチャッチフレーズを使って宣伝するのも、地球環境問題が原因で涙を流さず、多くの人がずっと笑顔でいるためにというポジティブな発想も好感が持てる作品です。

奈良県の畝傍高校の音無君の「山から考える地球環境」は、和歌山県田辺市にある、8年前までは曾祖母が住んでいた家に行ったことを書いています。到着すると、石垣がイノシシに崩され、雑草が生い茂り、山水も来ていませんでした。田辺市は森林率が

89.2 パーセントで過疎化が進んでいます。間伐をしていない山は木が密集して細く、根も弱くなるため、地すべりなどの災害も起こりやすいのです。半日ほどかかってやっと、水がタンクに流れこみ、かまどで火を安定させるのも大変だと経験しました。めったに意識しない、水や火のありがたみに気付かされると同時に、色々なことに感謝することが身についてきて、自分たちの山を自分たちで維持していくことが、地球のために出来ることだと思いました。ささやかな努力の積み重ねが世界を変えると信じたいと結んでいます。

この作品は日本の過疎の山村で長年放置されていた空家で、人が生活できるように体験したことをまとめたものですが、そこは、人が自然と共に生きていた日本の原風景が広がる場所なのでしょう。都会周辺は、いまだからこそ便利な日本ですが、地方の山村には、いまだにこのような場所は多く存在しています。そこに焦点をあて、自分が努力して、水を開通させ、火を起し食事を作る。それは当たり前のお生活なのですが、便利な都会のお生活の中では決して分からない、自然との調和に気付いていくことを表現しています。地球のために出来ることとは結局自分が変わることなんだというのを、考えさせる作品でした。

和歌山県の本本高校の原さんの「まもりたいもの」は、パラオに青少年赤十字のメンバーとして訪れたとき、美しく透き通った青い海と現地の高校生をはじめ副大統領までもが優しく暖かく歓迎してくれて、夢のような1週間をすごしました。そのことが忘れられず帰国して、さらに詳しく調べたところ地球温暖化の影響でパラオの一部の道路や民家が浸水するときがあることを知ってしまったのです。

CO₂排出国世界第4位の国に住む自分としては小さなことでもできることを実践しようと動き始めました。環境について考え、行動しているうちに、自分は「自然」をととても愛していることに気付いたのです。振り返ると13歳まで育った家は緑に囲まれた山奥で、学校まではバスで1時間もかかりましたが、道路わきの自然の美さに、通学を苦にしたことはなかった。パラオと日本の田舎の共通点に気づき、地球の環境を守る仕事に就きたいと結んでいます。

この作品も、パラオの美しい青い海と、やさしく暖かいパラオの人々との出会いから、その美しいパラオが地球温暖化の影響で一部浸水していることが、環境問題を考え行動させるきっかけとなったのですが、美しい自然は、人を感動させ行動に向わせるまでの力を持っているのだと思います。しかも、自分の生い立ちを振り返り自然の美しさはパラオだけでなく、日本の田舎にもあったことに気付くのです。地球は一つの生態系であり、海も、空気もつながっているからこそ、世界のどこの環境も大事にしなければならないのだということを考えさせられる作品です。

沖縄県の名護商工高等学校の宮城さんの「脱 無関心」は高校に入ったときに「携帯電話を持っていますか？」と先生に聞かれたことから始まります。同時にアフリカの子供が銃を持った写真を見せられました。どんな関係があるのか分かりませんでした。それは、アフリカでは、携帯電話の原料の採掘作業を子どもにやらせ、利権争いの兵士として戦わされているとのことでした。遠い国で起こっている戦争は自分と無関係ではないと思い始めました。そのあとに、「平和の鐘を鳴らそう」というワークショップで「平和ではないとはどんなことか」を聞かれ、考えた言葉をあげました。戦争、テロ、貧困、差別、自殺などたくさんの言葉が出ました。この言葉の中で消せる言葉はと聞かれて考えたけれど、一つも消すことができませんでした。先生から、それは自分が「無関心」になっているからではないかと問われました。先ほどの言葉

の一つでも消すためには、無関心では何も変わらず、行動するという心の強さをもつことが大事だと分かり、自分も強い意志で行動していこうと考えましたと結んでいます。

この作品を読んで、「脱 無関心」を唱え物事を真剣に考え、真剣に取り組むさわやかな若者らしさを感じました。構成も、迷いながらも、考えていく筋道がしっかりと組み立てられて、読んでいてとても分かりやすい文章です。最後に実際に行動するためには意志の強さが必要なことも気付いたようで、今後の行動が楽しみです。

もう一つこの作品を読んでいて、先生のアプローチやワークショップの力を改めて感じました。このファシリテーション力がこそがグローバル教育にとって必要で、この作品に出てくる先生やワークショップとの出会いがなければ、違ったエッセイになっていたことも考えられます。エッセイコンテストの背後には、グローバル教育を推進してくれるたくさんの人達が頑張ってくれているのだと改めて頼もしく思ったのと同時に、自分も頑張らなくてはと感じさせられた作品でした。

前にも書いたように、2005年までの「開発途上国や国際協力、国際理解について考えていること」と、難しい専門用語やイメージをつかみづらいタイトルに対して、「行動 ～地球の仲間のために、私たちができること～」というテーマは、「地球」という具体的な言葉がテーマに入った分、書きやすく、地球環境を意識した作品が定着しました。

海外体験に関しては、今までは親の仕事などでの現地滞在からの作品がおもな海外体験でしたが、最近の傾向は NGO や学校での修学旅行や研修旅行、自治体の海外や国内での研修プログラムなどが、各地で実施され多くの生徒が海外体験を持てる環境が整ってきたことが作品に大きな影響を与えていることがわかりました。

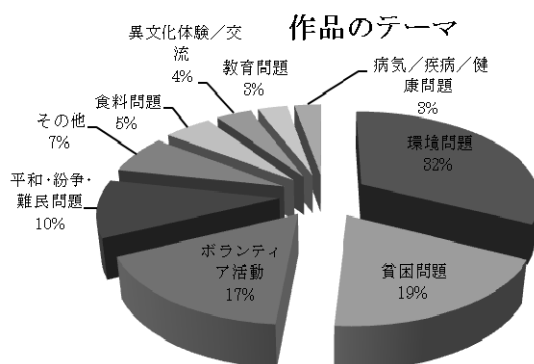
一方で海外体験がなくても、NGO や国際研などが主催するワークショップや国際交流集会での体験も多く書かれていて、海外に行った経験がないと、上位に入賞できないということは少なくなってきました。日本の中での国際化が急速に進んできている証拠でもあるでしょう。

いずれにしても、毎年優秀賞に選ばれてくる作品は読み応えがあります。コンテストの効果は、一つは、生徒がそれまでの人生から考えたことをまとめて書くことの意義ですが、もう一つは、その作品が多くの読む人たちに感動を与えることです。そして、この作品を書いた生徒たちが将来どう成長していくかもとても楽しみなのです。

応募作品のキーワードから詳しい傾向分析をしてみます

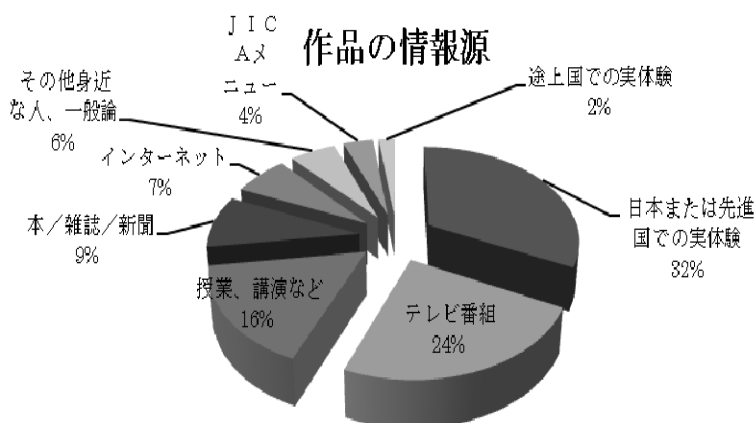
ここで紹介するデータは応募作品から各都道府県から2作品と選出作品4作品を加え中学生、高校生それぞれ100作品を無作為に抽出して比較、分析を行ったものです。

まず、生徒たちが実際に取り上げた作品のテーマですが、予想される通り、環境問題が32%と最も多い結果となりました。環境問題はエコ活動、ゴミ問題、地球温暖化など切り口が多様で、メディアで取り上げられることも多く、地球に生きている人すべてにかかわる問題なの



で、誰でも自分と関連付けしやすく書き易いテーマなのでしょう。続いて貧困問題ですが、世界で広がる格差の問題が、日本でも長引く不況の中で、いまや人ごとではなく、誰もが実感してきたことがテーマに選ぶ理由でしょう。そしてボランティア活動が続きます。学校や地域で、寄付や収集ボランティアを中心とするボランティア活動はもっとも身近で、誰もが経験していることからでしょう。今年は、エコキャップ運動についての内容が特に多かったようです。さらに最近では、NGOなどが、寄付や収集ボランティアへの参加だけでなく、国内や海外で実際に人を援助したり交流したりする活動への参加プログラムを実施しており、経験しやすい環境が整ってきたことも理由といえるでしょう。

作品を書く情報源ですが、「日本または先進国での実体験」が最も多く32%になりました。中学生、高校生の作品ですから、ボランティア活動など自分の身の回りの情報源から書くのは自然な結果でしょう。



次が「テレビ番組」で、メディアや、映像の影響力の大きさに驚きます。最近のテレビ番組では、開発途上国での取材番組も増えていて、日本に居ながらにして、世界の現状をリアルタイムで見ることができる、テレビの力は大きいと感じます。同じにバーチャルな体験を提供しているわけですが、「授業、講演」や「本、雑誌」が次に続き、映像メディアによる、体験が実体験に次ぐリアリティーを提供していることが分かります。意外だったのは、「インターネット」です。動画も、静止画も文章もすべてを含み、即時性ももっとも高いと思うのですが、本、雑誌より低い比率でした。最後の開発途上国での自分自身の体験は2%ですが、仮にこの割合を全応募者70000人にしてかけると1400人程度になり、いま、安定志向で海外に出ようとする若者が少なくなってきたと言われる中でこれだけの生徒たちが中学、高校生が開発途上国に、行って体験をしに来るような時代になってきたのには改めて驚かされました。

今後のエッセイコンテスト発展のために、いくつかの課題を解決しなければならない。

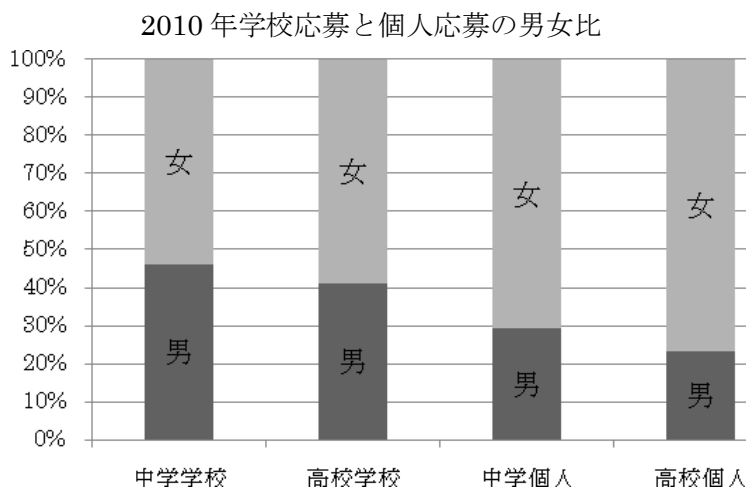
応募動機アンケート分析でも取り上げたように、夏休み明けの課題として提出する学校が多いことは数字の上からも明らかです。しかし、提出が9月10日前後では、生徒の作品を集め、指導点検して、まとめて発送するには無理があります。一次審査を受け持った教師からは、高校で400字詰め原稿用紙4枚、中学で3枚といった基準が示されているのに、明らかに枚数が少ないものも多く、審査での評価に困るといった意見も出ました。エッセイのとりまとめに時間がかけられず、加えて文化祭や進路指

導などと重なり、先生方の手が回りきれない状況を示す現象です。

北海道や東北などの冬季休業が長い地域は、夏休みが8月25日前後までのところが多いので、9月10日前後の提出でも2週間程度の余裕が取れます。しかし、それ以外の地域まで含めて考えると、締め切りは9月一杯か9月中旬以降の余裕が欲しいところです。この問題は、良い作品を増やすためにも、学校現場の実情を訴えていきます。参加作品数から見ても、メジャーなコンテストに育ってきたと感慨ひとしおですが、それだけにこれまで以上に公共性、透明性が必要になってくるでしょう。

国際研では、JICAに、一次審査を含めて各地の教員を審査員として参加させるように求め、実際に協力してきました。こうしたシステムを築いてきたことも、コンテストが大きく成長した要因となりました。中高生たちがグローバル 이슈を取り上げるコンテストとして、エッセイコンテストがさらに発展するためには、すべての審査段階において、外部からの審査員を必ず参加させ、一層の透明性を確保することが重要です。この課題もぜひ解決に向けたいと思います。協議の場を通じて、学校現場からの声を直接JICAに届けることで、より良いコンテストに育て上げていくことができると考えています。

毎年、課題となる応募の男子の比率については、2010年の学校応募の集計では、下の棒グラフに示すように男女の比率はやや女子が多い結果となるのですが、男女が自由に参加してくる個人応募の男女比率を調べると、中学の男子は30%に満たず高校の男子はさらに少なく20%を少し超す程度となり、男子が少ない状況は変わりませんでした。学校応募の傾向が、リピータの増加傾向により強まっている結果、クラス全員が応募することで学校の男女比に近づいたと解釈できるでしょう。やはり、男女比問題は解決してはいないのですが、学校応募が強くなればとりあえずは強制的にはありますが、男女比問題は解決するという事も分かりました。



このコンテストは男女を問わず中学、高校生に広く国際協力について考えてもらうためのコンテストであり、男女比が偏るコンテストでは、今の生徒たちが考えている心のすべてを知るに至らないだけでなく彼らが成長していくことで、広範な市民への国際協力への意識の浸透のためには望むところではありません。

一つの解決法ですが、「エッセイコンテスト」というタイトルが随筆的なものだけを想像させてしまうとすれば、テーマを具体的にいくつか提示し、論文的なものも、研究発表的なものも書きやすいようにするのも一つの方法かも知れません。

カテゴリー的にエッセイとは言いがたい研究発表に近い文章で入賞や入選した3作品を次に紹介しましょう。

2009年の入選作品で栃木県の小山北桜高校の佐藤君の「かんぴょうで地球を救う」という作品では、佐藤君の学校の周辺で夏になると風になびく白いかんぴょうを目にします。かんぴょうはユウガオの実をむいて乾燥させて作る保存食で、全国の90%以上がこの地区で作られている産地です。ところが高齢化と価格の急落で生産の危機を迎えているため、高校生にできる再生プロジェクトに取り組みました。株間の違いが収量に影響を及ぼすかの調査も行いました。また、栄養素を調べ、カルシウムが他の野菜に比べ豊富なことも分かりました。また、実をむくときに半分ぐらいの綿がでて、これが無駄になることも問題です。しかしこの綿を乾燥させて粉末にすることで、簡単にカルシウムを摂取できることも分かりました。さらに調べると、ユウガオはもともとアフリカに原種があることが分かり、栽培や加工技術を広めていけばアフリカの子どもたちを栄養失調から救う大きな可能性を秘めていると結んでいます。

続いて、2004年の作品ですが、兵庫県の播磨農業高校の宮永君が書いた「現代の青木昆陽をめざして」という作品で見ると自分が行ったサツマイモとヒヨコマメの混植栽培の研究から、ヒヨコマメの根に共生する根粒菌が土壤にたくさんの窒素分を残すため、混植したサツマイモの肥料なり、サツマイモの収量もあげることができる。これを利用して飢餓から人々を救えると考えたのでした。宮永君はいずれこの技術を持って青年海外協力隊に入り、現代の青木昆陽になりたいと夢見て努力していると結んでいます。

もう一例紹介すると、千葉県の君津青葉高校の伊井君が書いた「真っ赤な大地を夢見て」という作品ですが、高校でバイテク部に属し植物の組織培養に関する研究を行うなかで、優良な形質を持つ植物を大量増殖させることで、アフリカなどの食料問題解決の糸口になると考えたのです。しかし、組織培養は無菌の環境下で行わないと成功しないため、実験設備にコストがかかり、開発途上国では使えないのです。そこで、考えたのが食品添加物を使うアイデアです。無菌ではないが食品添加物が雑菌の繁殖をおさえ、低コストでの組織培養が可能であることを確認したのです。伊井君は今後この方法での研究を積み重ね、技術を磨きアフリカの真っ赤な大地に乗りこんでいきたいと結んでいます。

この3例は男子の作品です。共通するのは「エッセイ」というよりも「研究発表」に近い内容で書かれています。立派に入賞、入選として評価されています。

これらの例に代表される開発途上国を舞台にした技術支援をテーマにした論文的な作品も十分チャンスがあると考えてもらい、国際協力に対して様々なアプローチの作品が集まるよう、テーマに工夫をして欲しいと考えます。

また、今までの作品には、JICAを意識し技術協力などの作品は多かったのですが、経済や政治ガバナンスに関する作品は多くはありませんでした。こうした問題も考える作品が出やすいような具体的なテーマを考えていくことも、男女比の是正ばかりでなく、応募増につながり、国際協力の国民への啓蒙という大きな目的にもつながるで

しょう。

教師として生徒への参加勸奨はどのようにしたら良いのか

募集は5月から始まり、作品提出期限は9月の夏休み明けです。募集の案内とポスターは5月に全国の中学校、高校に送付されます。まず、最初やることは学校に送付されたポスターを校内に掲示して、生徒たちに早めに声をかけていただけると良いでしょう。過去の作品集もありますので、それを読むのもヒントになるでしょう。作品集が手に入らなくても、一番簡単なのは、JICA（国際協力機構）のホームページの中に入賞作品が掲載されていますので、それを印刷するのが良いでしょう。

生徒がエッセイを書くきっかけを作るのは、国際協力に関心を持っている教師の協力が必要です。ポスターを見て自主的に書き始める生徒はほんのわずかです。いい体験を持ちながら、それを表現することを気づいていない生徒たちを発掘するのも教師の役目です。

生徒から書く意欲を引き出すためには、授業や特別活動のなかで、国際協力に関わる単元で世界の今を考えさせる指導を行うといいでしょう。私は、いろいろなアプローチを考えますが、例えば教科「情報」の中で、情報の発信として、プレゼンテーションを作らせるのですが、そのテーマの一つに、世界の子供たちの現実を考えさせるため、ストリートチルドレンをテーマに設定します。図書館やインターネットで調べていくと、数千万人以上のストリートチルドレンが世界で生きていることに気づくのです。豊かな日本の現実からは考えられない現実を知り、それが国際協力への生徒の考え方に変化を与えます。理科においては地球環境問題から、家庭科においては食料や食の安全性の問題など、エッセイを考えやすい国語や社会、英語でなくても、さまざまな切り口が存在します。

また、総合的な学習の中で JICA のメニューを利用し出前講座で途上国での経験が豊富な青年海外協力隊員帰国者やシニアボランティアを講師として学校に呼び話してもらうのも、とても効果があります。ビデオや写真を見るよりも現場で活動した人の言葉にはリアリティと迫力があります。現地の人たちの気持ちを知っていますので日本人的に見た考え方でなく、現地の考え方に即した考え方を聞くことができます。これはステレオタイプの考え方に陥らないためにもぜひ必要なのです。

といっても、どんな人を呼んだらよいかわからない場合相談にのってもらえますので、地元の JICA 国内機関に連絡してください。

最も大事なことは、一人で考えるのではなく、全国国際教育研究協議会のように、全国の学校現場で組織的に、グローバル教育や開発教育を研究、実践している団体と連絡をとり、グループとして協力していくことです。各都道府県の事務局では、必ず教師研修会や生徒研修会を年に複数回開催しています。あらゆる教科の先生方がいますので、仲間ができて情報交換がたやすくできるでしょう。

教師自身の活動報告などはグローバル教育コンクールへの参加もできます

2004年、平成16年度から始まり今年で7回目となる外務省が主催してきたの「グローバル教育コンクール」があります。これは、日本のあらゆる地域で実施されている、効果的なグローバル教育の実践例を、選び、表彰し国民に広くフィードバックする目的で進めています。2008年までは「開発教育・国際理解コンクール」と呼んでいましたが、開発教育という言葉が分かりづらいという事から、2009年から「グローバル教育コンクール」と改称しておよそ700件の応募になり、今年は2000件以上の応募急増となりました。このコンクールの特徴は、「素材部門」と「活動報告」の2部門での応募ができ、小、中、高、大学すべての学校からの応募ができるとともに、市民一般、NGO、NPOからの応募もできるので、教師自身の応募も可能です。2011年からは、外務省主催ではなく、JICAが主催する形で引き継ぎます。エッセイコンテストとグローバル教育コンクールが、両軸となり、国民のODAに対する認知を増やし、収縮してしまった日本のODAを欧米のように、再度の上昇にむけたいものです。

エッセイ勸奨に活躍してくれた先生方にもっとステップアップしていただくために教師海外派遣研修があります

国際研では、教師海外研修、青年海外協力隊、シニア海外ボランティアへの参加を勧めています。

なんといっても、教師自身が開発途上国の現実を知り、国際協力活動に参加することで、帰国後には、現地で養った問題解決能力を、リアリティを持って授業に生かすことができるようになります。生徒達にとっても、とても良いフィードバックができることとなります。

教師海外研修は、JICAが進めるODAの啓発事業の一つとして12日間程度、全国から30名程度をアジア、アフリカ、中南米などの開発途上国の国際協力活動の現場に派遣して研修を行ってもらう制度です。わずか12日間ですが、ツアーでは個人では行くのが難しい開発協力活動中の村や、現地住民とのコミュニケーションがとれ、私的な旅行とは全く違った素晴らしい経験ができます。国際研ではエッセイ勸奨に特に努力してくれた先生や事務局活動に協力してくれた方を特に応援してJICAに推薦します。

青年海外協力隊は20歳から39歳まで、シニア海外ボランティアは40歳から69歳までの人が応募できます。基本的には2年間（シニアボランティアでは1年間の派遣もあります）、派遣された国の人々と共に生活し、地域住民と一体となって活動し、その国の経済的社会的発展に草の根レベルで寄与することが目的です。

文部科学省では青年海外協力隊に関しては自由参加システムの他、学校の年度と同じ4月から出発する隊員に関して、各地の教育委員会を通じての参加システムもできました。2年間、開発途上国の現場で自分が今までに蓄積してきた技術を使い人のために尽くす活動への参加は、今まで養われた自分の知識、技術が本当に人のために役立つかの検証でもあります。また、日本人がほとんどいない現地で長期にわたる活動は自分の意思を鍛えなおす期間にもなります。途上国へのボランティア活動ではありませんが、帰国後の教育活動への考えられないほど大きな力を得ることになるでしょう。

（募集は春・秋2回 春は5月）他の県の事情は分かりませんが、東京都では、シニアボランティアの派遣も、過去に許可されています。

全国国際教育研究協議会はグローバル教育、国際教育、開発教育を現場で研究、実

践する研究会です。全国 47 都道府県で約 2500 校のネットワークを持ち、各県において、様々な国際教育に関わるイベントを実施しています。教師研修会と生徒研修会もバランスよく行っていますので、まずはイベントに参加してみてください。毎年 8 月には、各地で国際教育・開発教育を進める教師が一同に集まる全国研究大会が開催され、教育実践を発表します。全国の研究を学ぶには良い機会になりますので参加されることをお勧めします。2011 年は、和歌山県で開催されます。国際研の情報はすべてホームページで公表しています。ぜひご覧ください。

国際研ホームページ <http://www.kokusaiken.org>

筆者紹介 東京都立新宿山吹高等学校 地学教諭 (海洋科学博士)
過去に青年海外協力隊員 (セネガル 環境保護視聴覚教育)、シニアボランティア (ヨルダンサンゴ礁モニタリング技術協力) に参加後、現 (財) 国際協力推進協会 (APIC) 理事、全国国際教育研究協議会常務理事、全国国際教育協会 (JAGE) 常任理事